

讃岐地域住民の生涯学習要求に関する調査研究－東讃の地域づくり課題を中心に－

香川大学 片岡弘勝

今日、全国各地でいわゆる「生涯学習まちづくり」計画等が盛んに作成され、議論されるようになった。ところが、これらは多くの場合、都市部で消費生活を送る一般的な「市民」を暗黙の前提において作成、実施される傾向が強い。また、ここでいわれる「まちづくり」の「まち」は決して「むら」ではなく、「近代的」な装いをまとった抽象的な空間概念である場合が少なくない。しかし、地域生涯学習においては、学習の主人公（学習主体）が自らの生活要求と学習要求を仲間と共に自らの力でとらえ、生涯を含めた生活総体の生活現実に根ざした学習を、自ら方向づけていく筋道が重視される。こうした学習の過程では、地域における暮らし方とその展望を見通す認識が問われ、学習主体とその援助者は生活課題とその背景にある歴史的・構造的な問題状況、及びこれを解決する方法と照らし合わせた学習要求を明らかにし、学習課題を設定することが求められる。

こうした地域生涯学習のあり方を検討するためには、基本的な作業として地域住民の学習要求を個別具体的にできる限り深く明らかにすることが必要である。また、この作業はさらに、地域住民の自然観と社会規範に根をおろした知および技術のあり方を個別具体的に解明する課題にとりくむ中で進める必要がある、と考える。

本発表は、以上の問題意識からまず基礎作業としてとりくんだアンケート調査研究の中間報告である。調査地域としては、香川県内のうちまず東に位置する東讃地域から始めることとし、大藪和雄が国勢調査特化計数、事業所統計特化計数及び統計資料をもとに香川県内市町の比較により同市町の特徴を明らかにした「香川県における市町の特徴」（『香川大学経済論叢』第66巻第3号、香川大学経済学会発行、1993年12月）に主に依拠し、できるだけ多種類の職種から標本を得るために、長尾町及び大内町の2町を有為に選び、各々20歳以上の個人を母集団として1/25を単純無作為に抽出した。標本数は長尾町410、大内町542、計952でありアンケート票を郵送により配布し、回収した。調査は1994年11月から1995年1月にかけて行い、有効回収数は両町合算で404、回収率は42.4%であった。長尾町及び大内町の人口は各々約1万3千人、約1万7千人、両町ともに香川県の中では第二次産業と第一次産業が相対的に多いグループに属す。なかでも長尾町は米、畜産の他、苺、葡萄、桃の栽培に特徴があり、大内町は手袋およびニット製品の生産に特徴がある。

アンケートでは、自由時間の量とすごし方（平日と休日）、暮らしの中の生きがい、不安、希望する将来の地域像、学習・文化活動・スポーツへのとりくみの有無、同とりくみの内容と場所・機関、学習・文化活動・スポーツにとりくまない事情・理由、希望する学習・文化活動・スポーツの内容、希望する時間帯について回答していただいた。本発表では、地域づくりの観点から両町のデータを一括して考察し、生涯学習要求の基本的な構造と特質についての報告にとどめた。その主要な特徴を3点だけ以下に示したい。

①個人的な趣味、生きがいに関する学習への要求が概ね0.3%から約12%の比率で存在するのに対し、健康及び暮らしの安全・安心を確保するための学習への要求が約20%の比率で存在した。その他の設問でも自然環境の恵みを大切にし、気心の知れた人と安心して暮らすスタイルへの志向が強くみられる。②地域福祉に関する生活要求と学習要求が比較的強い。③希望する生涯学習の時間帯は、休日よりも平日夜及び土曜夜が比較的多い。